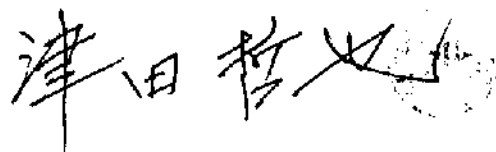


# 陳述書(1)

2007年8月27日

東京地方裁判所民事部 御中

被告本人



## 1. 経歴など

私は、1959年2月16日生まれで、報道を職業とするフリーランスのジャーナリストです。

雑誌では、おもに講談社、小学館、徳間書店などが発行する週刊誌に取材記事を寄稿しております。

テレビでは民放各局の報道・情報番組に、「銃器評論家」もしくは「ジャーナリスト」の肩書きでコメンテーターとして出演しておりますが、企画・コーディネートとして番組制作に携わることもあります。

コメンテーターとしては、銃器犯罪と警察犯罪を専門としますが、取材・執筆活動ではカルト教団や経済犯罪、暴力犯罪など、扱うジャンルは多岐にわたります。私は権力や報道機関におもねることなく真理を追求したいとの信念から、一つの事件に長期間をかけて追い、不正や疑惑を暴いていく、いわゆる調査報道をモットーとしています。

著書に、ノンフィクションでは『銃社会ニッポン』（テレビ朝日出版部）、『銃器犯罪』（現代書林）などがあり、近年は『汚名刑事』（小学館）、『脳を食む虫』（マイクロマガジン社）などの警察小説も執筆しております。

## 2. サンラ・ワールド社らの存在を知ったきっかけ

サンラ・ワールド株式会社（以下、サンラ・ワールド社）と増田俊男氏（以下、増田氏）の存在と、その違法性が疑われる出資金集めの事実を私が知ったのは、~~林~~氏（以下、~~林~~氏）からの情報提供がきっかけでした。

(1) 私は、1997年11月に横浜で起きた神奈川県警所属の警察官の不祥事によ

って男性が死亡した事件について、『週刊現代』（講談社）とフジテレビの委嘱で取材をしていました。●●氏、この事件について紹介された取材協力者でした。この事件については、私は『週刊現代』に2回の記事を執筆し、フジテレビでも特集を組んで報道がされました。さらに、この男性の遺族が1999年に横浜地方裁判所に国家賠償請求訴訟を提起したことから、私は取材を継続し、その後再び、『週刊現代』で連載記事を執筆する一方、テレビ朝日とタイアップしニュース番組のなかで特集が放送されたこともありました。

この横浜の事件の取材が、国家賠償請求訴訟の提起にともなって長期化したことなどから、私と●●氏は、取材の対象として、その後も付き合いが続きましました。真の意味で報道を職業とする者は、取材の対象者らと公正で対等な関係を保ちつつ、多方面に人脈を拡げておく必要があります。そのような経緯から、●●氏は、私の多くの情報提供者の中の一人となりました。

- (2) 継続取材中だった横浜の事件で、被害男性の遺族が加害警察官を横浜地検に刑事告訴をした翌月の2000年4月、私は●●氏から、「友人がパーティーをやるが、一緒に行かないか」と誘われました。誰が主催する何のパーティーなのかは聞きませんでした。スケジュールの都合がついたので、私は日ごろの付き合いの一環として、同伴させていただくこととなりました。

そのパーティーは同月18日、東京都文京区関口の『椿山荘東京』で開かれました。当日、夫人をともなった●●氏が運転する自家用車で迎えにきてもらい、会場の『椿山荘東京』へと向かいました。このとき、●●氏から招待状をもらって、初めて何のパーティーなのかを知りました。サンラ出版株式会社（以下、サンラ出版）という会社が創刊した『資本の意志』という月刊雑誌の出版披露パーティーだったのです。

それは広い宴会場を借り切り、数百名を集めた盛大なパーティーでした。会場の舞台上に主催の関係者らしき面々が並んで開場の挨拶をしたあと、政治評論家の竹村健一氏が短いコメントをして、すぐに退場していきました。

舞台上に立った人たちのなかで「あれが私の友人で、新しく出版した雑誌の編集長だ」と●●氏が教えてくれた人物が、のちに公認会計士の●●氏（以下、●●氏）に対する脅迫を実行したサンラ出版の●●氏（以下、●●氏）でした。

今思い出せば、増田氏も舞台上でスピーチをしていました。●●氏から、「あれが雑誌のオーナーだ」との説明を受けたものの、興味がまったくなかったため、名前も顔も記憶に残りませんでした。ただ、舞台上で『ゴッドファーザー・愛のテーマ』などの歌を何曲も感情をこめて熱唱していた人物というのが、増田氏に対して残った唯一の印象です。

増田氏の歌唱ショーにうんざりして廊下に出ると、政治家などの名前が書かれた多数の花輪が目につきました。●●氏は、その花輪を指して「ぜんぶ自分で金を払って買ったものだよ」と言って笑っていました。また●●氏は、「竹村健一には、たった一言しゃべっただけで、50万円ほどのギャラを払っている」とも話していました。

それらの経費を含めて、このパーティーには莫大な費用がかかっていたも

のと推察します。サンラ・ワールド社の存在を当時知らなかった私は、『資本の意志』という新雑誌は、どこかの成金会社がスポンサーになって自費出版する雑誌なのだろうと解釈していました。

- (3) 雑誌『資本の意志』の内容と、サンラ・ワールド社という会社を具体的に知ったのは、それから4ヵ月あまり後のことです。●氏から電話があり、「●が編集長をやっている出版社で、フリージャーナリスト協会を設立するらしい。『ぜひ津田さんに世話人やってほしい』と●が言ってきている」と聞きました。「ライターを志望する若者を支援する」という設立の趣旨に賛同できる部分もあったので、私は2000年8月16日に開かれた設立集會に出席することにしましたのです。

会場は、東京都新宿区四谷の新宿エースビルでした。サンラ出版が入居するビルと同じ2階のフロアにあった日本中小企業技術振興協会の事務所が会場として使われていました。同協会は、サンラ・ワールド社が買収し、●氏が運営を任されていたという社団法人です。

この集會には、●氏の知人らしき数名の男性が出席してただけで、マスコミ関係者はいませんでした。

●氏は、設立の挨拶に代えて、自身の武勇伝を熱く語りました。それを聞き私は、猛烈な違和感を覚えたのです。雑誌編集長といいながら出版業については素人で、ジャーナリストとしてのキャリアもないばかりか、彼が語る経歴や思想は虚業家そのものでした。しかも、「国益のために」などという空疎なセリフも盛んに口にしました。何よりも事実を基礎をおくべきジャーナリズムとは対極をなす社会の住人だとわかり、私はとても不愉快な気分になりました。

さらに、その席で『資本の意志』〔資料2～3〕をもらったのですが、これを見て私は啞然としました。ひと目で「詐欺的商法の小道具」と判断できるような代物だったのです。書店コードを持たない定期購読の月刊誌で、薄っぺらい粗末な雑誌であるにもかかわらず、1冊当たり3600円という市場の相場を無視した売値でした。

編集主幹の肩書きを名乗る増田氏がその号で誌上対談した著名人とのツーショット写真が表紙を飾り、誌面のほとんどが増田氏とサンラ・ワールド社の自己宣伝でした。出版の目的が、親会社の商売に直結していることは、出版業に携わる者には一目瞭然でわかりました。そして、ページを繰ってみれば、サンラ・ワールド社が無登録で出資金集めや証券の売買をやっている会社であることは容易に判断することができました。

あの盛大な出版披露パーティーを思い起こせば、なおさら詐欺的な会社という疑いが強くなります。そのような会社の子会社が出版する雑誌が、フリージャーナリスト協会を旗揚げしようとすることに、私は憤りを感じました。集會から帰って、すぐに●氏に次のような電話をかけました。

「ジャーナリストは基本的に左翼です。虚業家や詐欺的商法は、我われが不正を迫すべき対象であって、そんな敵対する者がジャーナリスト協会を標榜しても、

